

「下水道の日」特別企画

みんな^で下水道広報



長岡 裕 (ながおか・ひろし) 氏

下水道広報プラットフォーム 会長



みんなで楽しく広報 ——それがGKP

6月25日、東京・千代田区の（公社）日本下水道協会において設立の会が行われ、「下水道広報プラットフォーム（GKP）」が設立された。このGKPは、「広範なステークホルダーの関心に応える『共感』の広報を展開し、下水道界に資源（人材、資金、ブランド）と元気を与えること」を目的とした組織だ。いわば関係するみんなで下水道の広報活動を考え展開しようという、情報交流、連携の母体となるものだ。活動内容は、毎月1回定例的（第1木曜日、「イチモク会」）に企画運営委員会や講話会、交流会などをワイガヤと開催し、その交流の中で企画を考えながら行動して広報活動を発展させていくとしており、7月の第1木曜日となる5日には第1回目の「イチモク会」も開催された。今後どんな情報発信や活動が生まれるのか、GKPに対する下水道界の期待は大きい。そこで、GKPの会長に就任した東京都市大学教授の長岡裕氏に、GKP設立の背景とその意義を中心に伺った。

（聞き手／月刊下水道編集部）

理解されないことへの二つの危惧

——下水道広報プラットフォーム（GKP）が設立されました。設立の会では非常に多くの関係者が参集し、GKPに対する期待も大きいように見受けられましたが、そのことに触れる前にお尋ねします。これまでの下水道広報については、どのよ

うにご覧になっていますか。

下水道の広報はこれまで、自治体がバラバラにやっていたことは否めません。自治体は下水道の広報活動として小学生・一般市民を対象とした施設見学会や、下水道に油を流さないでほしいというキャンペーンなどの取り組みを行ってききましたが、それらの取り組みはそれぞれの自治体の考え方でバラバラにやってきたという印象がありま

す。

それらの取り組みには共通して下水道のしくみを知ってもらおうという狙いがあったと思います。活性汚泥による水処理はどんなしくみになっているか、あるいは油を流さないでほしいのはどんな理由からか、などの情報発信は、その狙いを示したものとイえるでしょう。ただ、その取り組みにはやや内向きの印象があります。

教育の現場にある先生たちやマスメディアの方たちなど下水道界以外の人たちと一緒にあっての広報活動や、下水道そのものの意義を感じてもらおうという取り組みは少なかつたのではないかと私は見えています。

——下水道事業そのものが大きく変わってきたということもあります。

下水道には公衆衛生の確保、浸水防除、公共用水域の水質保全という従来の役割のほか、資源循環などの新たな役割も出てきています。しかし、下水道というのは、汚れた水を捨てて、それを排除するものだとしか見られておらず、資源循環や地球温暖化防止などにおいても貢献していることについては、まだ一般には知られていません。施設見学会にしても、汚泥処理や資源回収などの段階まではそのメニューの中に入っていなかったのではないかと思います。そういうところを含めて下水道の意味、意義、将来の展望は知られていなかったし、知ってもらうという努力も少なかつたのかなという気がします。

——大きな課題ですね。

私がとても危惧しているのは、一般市民が下水道に対し、水道料金と一緒にその使用料を払っているがゆえに、下水道使用料は取られているという意識・感覚しか持たなくなってくることです。下水道は捨てるためのものだから、下水はただで捨てるのは当たり前だと思われていて、整備や維持管理などの努力に対して理解がなくなってくるということです。下水道はこれから維持管理の時代になり、その維持管理にお金がかかることを理解されない状態が続いてくると、下水道の持続的な経営が成り立たなくなってきました。

もう一つ危惧されることがあります。私は水に関わる研究を進めていますが、その契機となったのは数十年前、水環境が悪化していた時代です。それに関わる研究に取り組み、水環境を良くしたいと思ったのが、この分野に飛び込む発端となりました。私は衛生工学の出身ですが、当時はそれによって衛生工学を志した人たちが多かつた。また私の前の時代は、水俣病やイタイイタイ病などの公害問題があつて、その公害問題を解決したいという思いから、衛生工学を目指した人たちも多かつたと思います。

ところが幸か不幸か水環境が非常に良くなってきて、どぶ川のようなところは今や少なくなつています。その結果、水環境を何とか良くしようと考える大学の進路を決める学生も少なくなつていく気がします。そうなつてくると、上下水道など水循環に関わる世界でやってみようという若い人材がいなくなる、技術者がいなくなる。ということは、水循環に関わるいろいろな課題に対して技術の革新が求められるけれども、それに取り組み人材もいなくなります。

ですから、下水道の広報の対象としては、一般市民の方たちもそうですが、小学生や大学生といった将来を担う人たちも、重要であり、その人たちに下水道に目を向けてもらう意義は非常に大きいと思っています。つまり、下水道の広報には、事業の持続性と人材の確保という二つの面があると考えています。

市民感覚と広報に対する評価

——自治体の広報活動は、バラバラかも知れませんが皆一所懸命ですよ。

一所懸命ではあるけれども、やはり連携が足りないのではないかという気がします。その手法の良し悪しはともかく、例えばテレビコマーシャルで下水道の理解を深めてもらおうと考えても、一つの自治体ではとても実現できません。それは上水道も同じです。しかし、連携することによってマスメディアに広報を打つような取り組みがこれ



設立の会のもよう（6月25日）

からは必要になってくると思います。そのときにやはり個々の自治体がそれぞれ単独でバラバラにやっているのでは、そのような取り組みには手が出せません。

また、広報活動の企画やメニューの問題があります。個々の自治体の広報活動にはいろいろな企画や創意工夫がありますが、それらの企画や創意工夫の情報が集約されていない、情報交換がされていないのではないかと。日本下水道協会のホームページにいろいろな取り組みの事例集とかあるのですが、もう少し踏み込んで情報交換をし、「どういう広報が良いか」あるいは「あの自治体で良い広報をやっているから私のところもやってみる」といったみんなで広報について話し合うような場がなかったのではないかと思います。

——これまでの下水道の広報には内向きの印象があると仰いましたが。

学校の関係者や一般市民など下水道界以外の分野との共同作業や交流が極めて少ないので、一般市民の感覚から若干ズレている気がします。例えば、「油を流さないでください」という情報発信は、全くそのとおりではあるのですが、それは自分たちのための情報発信にとどまっているのではないのでしょうか。処理施設にしても管路施設にし

ても、維持管理のために油がないほうがいい。「活性汚泥のしゅみがこうなっている」というのもそのとおりではありますが、どうも自分たちのやっていることを知ってもらうということにとどまっている気がします。もう一步踏み込んで、一般市民と一緒に共同作業をし、下水道事業そのものを知ってもらう、下水道事業そのものの意義を理解してもらうという視点が、ゼロではないにしてもちょっと足りない感じがします。

——効果的なPRとは何かについてあまり考えられてこなかったという面はありませんか。

それは若干あります。自治体の方々は広報活動を一所懸命やっていますが、それでどういう効果が上がったのか評価の視点が足りない気もします。もちろん、いろいろな市民アンケートやモニター調査なども実施してはいますが、こんな広報の取り組みでこんな効果が上がった、あるいは上がらなかったというアウトプット、評価は少ないのではないのでしょうか。そのアウトプット、評価が出なければ、なかなかやる気も出てこないでしょうし、次の手も打てません。だから、何かをやったら、その評価の方法があるといいですね。

また、自治体の下水道部局にはPRの部局はあるのですが、広報のために人材を集めるとい

うこともされていないでしょうし、技術や経営が第一で、広報は二の次になっていたのではないのでしょうか。

——広報は、技術や経営と同じ比重、同じ位置づけをされないといけないということですね。

当然そうだと思います。水道のほうはそのことに気づき始めました。水道は独立採算ですので、事業経営をするためには、どうしても水道料金の値上げをしなければならぬときがあります。例えば、耐震化や維持管理などを行うときです。そういうときに、一般市民の理解がなければ値上げはできません。だから、広報をやろうと。目的としてはかなり明確なものができているのですが、下水道のほうはまだそういう危機感がないのかも知れないですね。まだ一般会計からの繰り入れがあったりするので、自立して経営しようという姿勢になっていないのが、一つの原因かも知れないですね。民間企業は、商品が売れなければいけないという明確な目的がありますから、それではいけません。下水道の場合、そうした明確な目的、危機意識が足りなかったのではないかと思います。

いきなりの下水道はマニアック

——ここ数年の状況を見ると、自治体の下水道部局は上水道部局や河川部局などと統合してきており、人材も減少しています。

水道と下水道は、今や都市生活において一体のもので、水道がなければ下水道は成り立たないし、下水道がなければ水道も成り立たない。ただこれまで、しくみや国の管轄の違いなどによってなかなか一体化できませんでしたが、技術的には共通するところが非常に多い。水処理、管路管理にはかなり共通したものがあります。また、管路については、一体化して管理したほうが工事などにおいて大きなメリットを発揮します。

ですから、たしかに下水道部局の人材は少なくなっていますが、上水道部局との統合によって協力できる場所も少なくありませんし、その必要

もあるでしょう。統合によって人材は、単純にみれば拡大しますから、メリットも少なからずあるわけです。水道、下水道とも基本的なバックグラウンドとなるのは土木工学や水質管理・水処理技術ですから、そうしたバックグラウンドが一緒のものは組織も一体となったほうが人材も豊富になると思うのですね。河川部局との統合についても同じことがいえます。

河川部局内部では、河川環境が良くなったのは下水道が整備されたからということをもみんなが認識しています。しかし、そのことは一般市民の間ではなかなか意識されていないのではないのでしょうか。ですから、河川環境が良くなってきたのは下水道の貢献だということを知ってもらうとともに、特に教育の現場で、水環境という切り口から下水道の話に入ってその意味、意義を伝えていくことが大切かと思います。

水道もそうですけれども、いきなり水道、下水道の話から始めると、ややマニアックな世界としか受け止められかねません。上下水道事業に携わっている者は、なぜ一般市民は理解してくれないのだと考えますが、一般市民は我々が考えるほどは考えてくれません。学校の教育現場でもそうです。先生方にいきなり下水道のことを生徒たちに教えてくれと頼んでも、先生方はマニアックな世界だとして、なかなか食いついてきません。それが、水環境というとすんなり入っていきます。

下水道にはほとんどありませんが、河川にはNPO 団体がたくさんあります。川は目に見えるし、川には生き物がいるからです。河川のそんなところをうまく活用し、河川から下水道に関心を持ってもらえる。そうした視点が必要だと思うのです。同じ広報でも、河川との協力は非常に有効だと、私は考えています。

楽しみが待つ交流の場へ

——GKP 発足に対しては、私自身の周辺ではさまざまな議論がありました。その中から二つの議論についてお尋ねします。一点目は、日本下水道

協会はGKPの事務局になっていますが、同協会の広報活動は今後どうなるのか、という点です。

GKPと下水道協会との関係については、ここまでは下水道協会、ここからがGKPという役割分担がまだ議論されつくしていないところがあり、今のところは明確化されていません。私自身は、GKPそのものが具体的な広報活動を実行するのではなく、いろいろなメニューや企画を集めてきて、その情報を下水道協会に提供し、具体的な広報活動は下水道協会にやっていただくのだと思っています。

GKPはプラットフォームですので、みんながいろいろな場所です。そこで我々はいろいろな情報を集める、あるいは一般市民や学校関係者、民間企業と一緒に考えてアイデアを出し、そのアイデアを実際に下水道協会に使ってもらう。私はそんなふうに考えています。

ただ、それはまだ明確でないので、今後議論していくことになると思います。

—— 二点目の議論です。広報というのは単に情報発信するだけではなく、情報発信を通して自分たちが変わらなければいけないのではないのかというのですが。

広報にはもちろん相手があります。今までは関係する議員の先生や業界の中などでしたが、これからは一般市民や学生、生徒、児童が相手になります。相手となるそれらの方々の理解を得るということは、当然、わかりやすい言葉で語らなければいけません。そのわかりやすい言葉で語るということを考える中で、その相手の方々を意識するようになります。それを通して下水道事業はどうあるべきかを考えていくことになりますし、その中でおそらく自然に変わっていくのではないのでしょうか。変わることが目標ではなく、自然に変わっていくのではないかと私は思っています。

—— GKPは、関係するステークホルダーみんなが広報するのが目的になっていますね。

そうです。国や事業運営者である自治体、民間企業はもちろん、大学・学識経験者、NPO団体、関連団体、下水道に理解のある個人、そして下水道利用者を含めみんなで活動していこうというのが目的です。その仕掛けがGKPです。

—— それ自体が極めて難しいことのように思います。

難しいですけども、それを目標としてやりたいと思います。

まずは下水道界内のコミュニケーションを積極的に進め、GKPがそれらの方々——特に事業運営者である市町村の方々と下水道の広報を共通して考えるきっかけになれば、と考えています。

—— 最後に、新たに発足したGKPの会員に対して、コメントをお願いします。

下水道広報に対する私自身のイメージは、10年20年という長い時間をかけて草の根的に地道に活動していくというものです。小学4年生で下水道を教わった子どもたちがお父さんお母さんになったときに、その子どもに「下水道って重要なんだよ」と教える、そんな循環を目指したイメージです。これはあくまで私自身のイメージですが、すぐに結果が出る効果が出るということは期待できないかも知れません。

とにかくGKPの活動を持続的に続けていくことで、下水道の重要性を社会に浸透させていきたい。そのためには、「イチモク会」に参加していただき、交流することで楽しい時間を過ごしたいし、過ごしてほしいと思います。楽しみながら、多くの会員と広報を考えていく仕掛けにしたいと思っています。あまり難しく考えないで、とにかくその場を楽しむような気持ちでやりましょう。楽しくないと、続かないですよ。そこに行ったら、何か面白いことがある、いろんな人に会える。そういう楽しみがないとなかなか続きません。楽しみという要素はとても重要です。楽しく続けたいですね。